



沖縄国際大学 FD通信

沖縄国際大学 FD委員会／企画・調査小委員会 2010年6月28日発行

『教育支援者(TA・SA)』特集 第2弾 「動作法」の SA 活用事例

前号に引き続き、「教育支援者(TA・SA)」特集！

人間福祉学科・心理カウンセリング専攻の授業から、「動作法」(平山篤史・講師)のSA活用事例を紹介し、実際にSAを活用している教員、SAとして、活動している学生の「生の声」をお届けします。

「動作法」を日々の生活の中で実践する方法を学ぶ —「実習型」の講義—

「動作法」とは、もともとは心理学的立場に基づく、脳性まひ児の動作改善のための援助技法として開発されたものです。現在では、動作法は自閉症児や精神遅滞児、重度・重複障害児などの、他の様々なタイプの障害児の行動の改善や発達の促進、また、神経症や精神分裂病などの患者さんたちに対するカウンセリング・心理療法にも有効であることが確認され、ひとが充実した人生を送ることができるようにするための新しい援助法として発展してきました。《「動作法テキスト」(東海北陸心理リハビリテーション研究会)より引用》

この授業では、理論の学習と実技を行い、動作法を日々の生活に活かすことや、援助技法として活用することを目指しています。

授業は、理論と実践を組み合わせ「実習型」の授業で、受講学生はペアを作り、お互いに「援助者役割-被援助者役割」を取り、その日のテーマとなる動作法の技法を習得するという流れで行われました。

そのため、この授業は、通常の教室ではなく、厚生会館3階の畳間で行われています。

今回の授業におけるSAの役割は、授業前後に測定する「身体を感じ方の尺度」を記入するペーパーの取りまとめ、テーマとなる動作法をレクチャーする際のモデル、技法習得のための指導補助及び質疑への対応でした。

この授業では、SA2名を配置して、教員1人では巡検の行き届かない部分をサポートしていました。

授業は終始和気藹々とした雰囲気の中行われ、学生のSAへの質問も活発に行われ、学生が楽しみながら受講する様子が見えました。



『先生がSAを必要と感じていても、学生が必要性感じていなければミスマッチが起こる。』

(SA: 浦崎安規さん、山城智章さん)

Q1: 現在の学生生活についてお聞かせ下さい。

浦: 知的障害者施設や塾の講師のアルバイトをしています。また、月例会で動作法の実践を学んでいます。サークルは、写真サークルに所属しています。

山: コンビニでバイトしています。浦崎さんと同様月例会で動作法の実践を学んでいます。サークルは、ボーリングサークルに所属しています。

Q2: どうして、SAになろうと思ったのか?

浦: 動作法は、2年生から続けてきたテーマでもあること、また、卒論のテーマでもあること、そして、更に「動作法」の技術磨きたいと思ったからです。

山: 「動作法」は、月例会で学んでも、分からないことが多いのもっと知りたい、自分を向上させたいと思ったからです。授業の時間だけでは、理解の範囲が限られてくるので、SAとして、学生の役に立てればと。

Q3: 授業では、主にどういったことをしているのか?

浦・山: 授業前は平山先生と打合せ、SAとの業務内容すりあわせを行い、授業では、指導補助、質問への対応を主に行っています。授業後、30分くらいかけて、授業内容を振り返り、気づいたことをSAの立場から述べています。また、出てきた課題を次の授業へ活かすようにしています。

!「教育支援者」の経験は、学生のキャリア形成過程で大きな財産になりそうです!

Q4：担当教員からどのようなアドバイスをもらいましたか？

浦：「動作法」は特殊な学問なので、学問領域を理解すること、主体性を相手に持たせること、自信を持つこと、分からないことは分からないという謙虚さを持つことなどのアドバイスを頂きました。

山：「動作法」は、明確な答えがない学問なので、自分なりの仮説を常に立てるよう言われました。

Q5：SAの活動を実際に経験しての感想は？

浦：充実感がありますが、責任を強く感じます。授業運営が上手く機能していたら成功だなと感じますが、もたついたなと思ったら失敗だなと感じています。

山：私が受講していたときは、SAがいなかったので、SAの存在自体が成功といえるかもしれません。課題は、同じ学生なので、どうしてもたまに控え目になってしまい、遠慮してしまうことです。

Q6：SAの経験は、今後の学生生活にどう活かすか？

浦：教える立場と学ぶ立場の2つの視点を持つことができて今後に活きると思います。気配りや配慮などの人間性がSAの経験を通じて身につけてきたので、社会に出たときに役立つかもしれません。SAの経験は、授業内容以外で得ることが大きいです。

山：第3者的な視点を持つことができた経験は大きいです。また、質問を通じて、色々な立場の意見を知ることができるので複眼的視点が身につくのが大きな経験になります。

Q7：教育支援者制度に対してのメッセージを下さい。

浦：先生がSAを必要と感じていても、学生が必要を感じていなければミスマッチが起こり、授業が機能しにくくなります。その辺りを検討し、活用することが大事だと思います。また、授業運営に支障を来さないよう、SAの適性を見極め、教員とSAの信頼関係の作ることを心がけてほしいです。

山：SAの配置が、必要なかと思う授業もあります。必要性については、議論がもっと必要かもしれません。「動作法」に関して言えば、SA2名で少ないと感じる場面もあります。また、今後、「動作法」の指導補助が出来る適性を持つ者がいないのが課題です。これは、他の授業との兼ね合いから、2年生が「動作法」の授業を履修できないことに起因しているので、時間割やカリキュラムの順次性について、検討頂ければと思います。

Q8：将来の目標は何ですか？

浦：本学の大学院に進学し、臨床心理学を学びたいです。

山：大学院進学か教職が悩んでいるところですが、動作法、グループアプローチで得たことが、生きるような道に進みたいと思います。



『学生の「つまずき」や「分からない」部分を見つけやすくなりました。』（平山篤史・講師）

Q1：SAを活用して、授業に変化はありましたか？

45名を1名で見るのは限界がありましたが、SAがいることで教員の手が回らないところも手が届き、学生のニーズを細かく拾えるようになったのがとても大きいです。学生の「つまずき」や「分からない」部分を見つけやすくなりました。

Q2：SAを活用する上で、心がけていること、工夫はありますか？

教員が学生に「質問して下さい」と言っても、なかなか出てこない場合が多い。なので、SAから、「こういう質問が良い」、「学生はこういうのが分からないのでは」、「学生にこういうのは難しい」、「先生のこの説明は学生に伝わってない」などの情報を共有する時間を作るようにいつも心がけています。

Q3：教育支援者制度についてのメッセージを下さい。

学生にとって、TA・SAは話しやすい方々なので、学生は彼らにどんどん質問して下さい。学生の意見や要望の中で、教員に伝わりにくいことが、TA・SAを通じて、伝わるケースが多いので、活用を考えている先生方にとって、この点は有効に活かせるのではないかと思います。

Q4：今後のFD活動に向けての期待は何ですか？

現在、FD支援プログラムの中で取り組んでいると思いますが、授業評価アンケートが自分の授業に活かせるようにして欲しいです。授業によっては、質問項目が適さないケースが多くその修正が必要ではと感じています。

私は大学教員として、この大学が初めてです。なので、他の教員の授業、特にベテラン教員の授業などを参考にできたらいいなという思いがあります。授業見学、参観という形でも良いのですが、「こんな授業をしている」、「授業内でこんな取組したら効果的だった」という事例を教員間で紹介、共有する機会があればと思っています。

！紹介したい授業があれば、授業課までご一報ください！